『國民新報』1939年9月3日

[主張]　名譽の孤立　－たゞ皇道、勇往邁進あるのみ―

　を[[1]](#footnote-1)からはう、にのよりはうとふのに、といをんでゐたドイツがとをんだ。にくせられんにかれたドイツとしてはにはへられぬのさもあつたであらう。

　このドイツの一によつてされたの、びとしてるべき、獨伊露ととののにし、はなるとをてむべきであるか。一にしてへばのあるのみだ。一のはによつてのみしげられたとふのがのへるところである。のはのとと、してのによつてのみなさるべきだ。なまじつかの一とにしろのにあるよりも、てのよりしてにアジアをしたがツいでないだらうか。やには一のいもないのだ。のずるにひにをふをよりへられたのだ。れのであれにくはアジアよりはれるであるべき[で]ある。

　このにり々と々[の]にるものはとしてのだ。十二七七にまれかはつた々は、一まれかはらう。あらゆるのをて、のためにをはさう、をさう。百が萬一のをめよう。してがじしのにする三の一のころとなるをしよう。

1. 単行本『同胞に寄す』では「不幸」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-1)